

随 筆

ノーベル文学賞作家・大江健三郎氏とカズオ・イシグロ氏の 未来へのメッセージ

辛島 千恵子

[はじめに]

2017年ノーベ賞授賞式のスピーチで、イシグロ氏は「母に報告した時、思わず『ノーベルショウ』と日本語で・・・」と述べられました。「ノーベルショウ」という日本語の響きは、鮮烈な言葉として私の心に残りました。その後、それまで全く手にしたことのなかったイシグロ氏の小説を読み始め、どんどんその世界に引き込まれました。その理由の一つは、日本人の懐かしい生活の紡ぎが投影された描写がとても心地よく、優しさ漂う言葉が魅力的であったことです。そして、もう一つの理由は、イシグロ氏は1954年生まれで私とほぼ同時代を歩んで来られた作家さんであり、作品への共感性が高められたのだと思います。私たちの世代は、1945-46年生まれの団塊の世代や戦争を知っている世代に比べて、精神力の弱さを非難されるような「三無主義」の世代と言われ多感な青年期を送りました。三無主義とは、無関心、無責任、無感動という意味でした。確かに団塊の世代のような社会に向けての闘争心の炎は消えて、高度経済成長の恩恵の下で利己的な生き方が中心になりつつあった世代でした。しかし、それはあくまで社会から我々青年の社会的行動を俯瞰して捉えた場合の印象であったと思います。三無主義と捉えられた我々の社会的行動は、それまでの青年の行動をやや批判的に捉えていた姿ではなかったか？と感じています。しかし、当時それに説得のある反論もできず、妙な劣等感を抱いたまま青年期を過ごしていたように思います。その青年期に感じた悶々とした思いを引きずりながら未来を探究する術への答えが、大江氏とイシグロ氏の小説から探究できたように思います。つまり、大江氏の小説から戦争の意味と敗戦後の青年が失ったものと新しく創り上げることの大切さを知りました。そして、古き人が新しき人と共に生きる練習をしながら、バトンを渡すことの大切さを感じ取りました。そして、イシグロ氏からは、美しい言葉の力による感動を通じて平和を想像する可能性を感じました。

本随筆では、書評ではなく両氏のノーベ賞受賞記念講演と私が読み終えた小説をベースにして、感じたことと未来へのメッセージなどを私の言葉で表現し

たいと思います。

[大江健三郎氏：戦争経験者からの共生と平和の創造へのメッセージ]

大江氏は、小学校高学年で終戦を迎えました。大人から戦争の正当性を教わり育った世代のお一人です。敗戦後、その価値は一変して民主主義国となり価値観も転動しました。大江氏より10歳ほど年上の三浦綾子氏は当時教職についており、昨日まで正当だった戦争を賛美した表現箇所を黒く塗りつぶすことを生徒さんに指導しました。教師として、その行為へ言いようのない虚無感から教壇を去る決意をしました。大江氏は東大在学中の初期の小説で、戦後の日本に立ち尽くす青年の心理的葛藤などを表現されています。1970年初頭、大江氏は各大学の学生自治集会へ引っ張りだこの時期があり、大学の校舎には「大江氏を迎えて、沖縄を語る（または、憲法を語る）」などのポスターをよく見かけたものでした。当時、私は高校生で大江氏の小説は難しく、全く手に取ったこともありませんでした。当時は、宮本百合子氏、三浦綾子氏などの女流作家からのメッセージに関心があったように思います。私が大江氏の文学に出合ったのは、既に三十路も終盤に差し掛かった頃です。

大江氏のご長男（光さん）と共に紡いだ時間とその内実を執筆した一連の小説に引き込まれていきました。私自身にも大切な人との突然の別れが続いた時期でもあり、心の闇を覆い込むような優しさと生きる事自体の尊さを「美しい言の葉」から感じました。今、考えるとこの瞬間が後述するイシグロ氏の「エモーションへの響き」だったように思います。光さんは、生まれながらに頭蓋骨異常のあるお子様として生を受けました。その光さんとの日常から大江氏が多くの「生きる」こと「生かされている」ことのメッセージを私に贈って下さいました。例えば光さんを東京駅で見失ったエピソードからは、想像を超えた光さんの生きる力に父親としての感動の響きを表現されていました。そして、コンサート会場の階段を大江氏が光さんを負ぶって昇ったことを「僕がパパを負ぶって階段を昇りました」と主張する光さんに対して大江氏は「本当は僕が負ぶってもらっていた」ことに気づかされたエピソードから共振、共生の意味を伝えられています。それらのエピソードが個人的経験でありながら、読者の感じる力で受け止められて感情に響き、個人的体験でありながらも普遍性が漂う真実性として重く心に止まり、感動の暖かい涙が頬を濡らしたように思います。

1994年のノーベル賞授賞講演では、アジア諸国への侵略者である日本がアメリカと共に民主主義国家としての歴史を背負う両義性（過去への背信と新しい

国の創造)をもつ国であると述べました。そして、その日本にいるご自身を「あいまいな日本の私」と語りました。1968年に同じくノーベル文学賞を受賞した川端康成氏の「美しい日本の私」のスピーチに対して、日本の過去の過ちに対する社会的立場を明確にした皮肉とも感じられるスピーチでした。

[カズオ・イシグロ氏：真実のエモーションから平和を創造する]

イシグロ氏は、1954年長崎に生まれ、5歳の時に海洋学者である父親の仕事の関係でイングランドに移住し1983年に帰化しています。1982年のデビュー作は「遠い山なみの光」です。英国人と再婚した主人公が長崎での生活の回想が描かれています。長崎が舞台となると反戦の空気が漂うものですが、昭和30年代の長崎の日常を淡々と、リズムカルに描いています。しかし、その登場人物は、敗戦後価値観の大きな変化により、過去と現在で揺れ動く人、戦前の価値観を大切に毅然と戦後を生き抜こうとする人、全ての登場人物がその時代を生き抜いたお隣さんなのです。徹底的に政治的立場から距離をおいた、庶民のエモーションな変化を中心に時代の情景が映し出されています。そこには、今をどのように生きるかという強い空気よりも、今の生活の丁寧な紡ぎから生じる人の「再生」が描かれています。さらに1989年の「日の名残り」でもイングランドの没落貴族に仕える一流の執事が密かに思いを寄せる女性との再会までの旅と回想を抒情的に描いています。執事の日常を単調なまでに描いているのですが、品のある旋律でリズムよく想像の世界が広がります。イングランドの風景と溶け込むような物語の旋律からは、日本の古き良き時代の美が投影されていることに驚きます。両書に共通しているノスタルジックな旋律は、映画監督、小津安二郎氏の作品の世界の影響を受けたとイシグロ氏も語っています。私も映画好きの母親と小津作品はいくつか観ていますので、懐かしい風景を通じて個人的な体験とエモーションで繋がり、静かな感動が透明なセロハン紙のように心に貼り付く体感を得ました。その後の作品でもサスペンスやコメディ感覚が漂う、読み物としての面白さも一流で一気に読破しました。

[エモーションから共生、そして平和を希求すること]

大江氏とイシグロ氏のノーベル文学賞授賞記念講演に共通するメッセージがあります。戦争を経験した世代の作家さんと戦争と原爆を体験した両親に育てられた世代の作家さんの「平和への希求」を大前提にしたいいくつかの共通メッセージです。それは、侵略戦争への責任ではなく、「戦争を忘れてはいけない」こと。イシグロ氏は「戦争への意図的な健忘症と挫折した正義を基盤に安定し

た自由な国家は創れない」と述べ、大江氏も「戦争の痛みから癒されて恢復することを何より求めて、私は文学的努力を続けてきました」と述べています。さらにイシグロ氏は「文学を通じたエモーションこそが国の境界線や隔壁を乗り越える。そして、新しい見方や思想が現れてスケールの大きな人道的構想が練られて、私たちの結集を促すかもしれない」と述べています。また、この偉大なお二人の文学者の「平和を希求」する文学の大切なもう一つの共通メッセージは、日々の生活の紡ぎを注意深く観て表現して、人のエモーションを共振させることから新しい見方が生まれて、人が再生されていくこと。そして、人のいとなみ自体が未来を創造することに繋がるということではないかと思います。

【おわりに】

1994年の大江健三郎氏のノーベル賞受賞から23年後の2017年のイシグロ氏の受賞。日本人が伝えなくてはならない大切なメッセージが講演で伝えられました。両氏の平和への希求を込めた思いが文字を通じて、私の母から受け継いだ遠い記憶と重なりました。そして、一旦、閉じ込めていたエモーションに共振し、その感動が暖かい涙となりました。きっと私の脳のどこかで母から伝えられた戦争の体験の記憶が呼び出されて、私の体を借りて母のエモーションが共振したのかもしれませんが。このように、人は人と共振しながら、大切なメッセージを引き継ぐことのできる存在なのかもしれません。世界の緊張が高まるなか、近隣国の核兵器の実験や平和を大国に委ねている日本の現状を考えると、偉大な作家さんからのメッセージは平和を強く希求するための大切なプロローグだと思います。

大江氏からの「共振・共生と恢復」、イシグロ氏の「エモーションへの響き」は未来を生きる私たちへの大切なメッセージではないか思います。

2018年8月 広島、長崎平和記念式典、終戦記念日を迎えて、黙祷

参考書

- ・大江健三郎：あいまいな日本の私。岩波新書、2012。
- ・カズオ・イシグロ（土屋政雄・訳）：特急二十世紀の夜といくつかの小さなブレイクスルー、ノーベル文学賞受賞記念講演。早川書房、2018。

（名古屋大学大学院医学系研究科 リハビリテーション療法学専攻 教授）